
二人の世界（仮）

さばの味噌煮缶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の世界（仮）

【Nコード】

N6591Z

【作者名】

さばの味噌煮缶

【あらすじ】

むしゃくしゃしてやった。今は後悔している。

誰でも良かった。いや、コイツ以外なら誰だって良かったのに。

人気のないゴミ捨て場で男を刺した。そして逃げた。死んだと思っていたその男は生きていて、何故かそいつに監禁されてしまった。

被害者（電波）と加害者の歪な恋愛。いや恋愛じゃないかもしれない。残念がフィーバーしている。

最初

桐島 きりしま
加野 かや

自分を刺した相手に惚れて、その相手を監禁しちゃったやばい人。

理子 あやこ

加野を刺してしまったたばかりに惚れられてしまった人。加害者から被害者になっちゃった。可哀想な子。

あらすじ

むしゃくしゃしてやった。今は後悔している。

誰でも良かった。いや、コイツ以外なら誰だって良かったのに。

人気のないゴミ捨て場で男を刺した。そして逃げた。死んだと思っていたその男は生きていて、何故かそいつに監禁されてしまった。被害者（電波）と加害者の歪な恋愛。

殺人（むしゃくしゃしてやった）

特に理由なんてなかった。

むしゃくしゃしてやった、今は反省している

少し前に流行った決まり文句。

動機なんて無くて、ただ、自分の為の逃避。自分の置かれた環境から逃げ出す為に行った非日常的行為。

それで何かが変わるなんて思っていなかったけれど、その瞬間だけは、確かに何かが変わっていたのだ。

瞬間的な非日常に酔いしれて、そしてすぐ背後に迫ってきた恐怖と罪悪感に追われるように、また逃げ出した。

その日、私は人を殺した。

受験勉強に飽き飽きしていた。まだ十五才なのに、将来の話ばかりする両親が嫌いだった。呑気に小学校に通う弟妹達が嫌いだった。長女だから、お姉ちゃんだからと言う親戚連中が嫌いだった。

ご両親が立派だからと言う近所の人たちが嫌いだった。

とにかく嫌いなモノばかりに囲まれて、私はそこから逃げ出したかった。逃げ出さなければ、押し潰されて死んでしまうと思った。

死にたくないと思った。

気がつけば私は家を飛び出していた。時間は深夜零時。鞆などは持っていない。ただ、ハンカチで巻いた包丁を一つだけ持って、走った。

人気のない町を、更に人気のない通りを選んで走る。

裏通りの複雑に入り組んだ道を走って、家から三キロ程離れたゴミ捨て場の前で、人影を見つけた。

まだ少し距離がある。

目を凝らして、人影を注視する。

相手は私に気づいていない。

今しかないと思った。

私は包丁を両手で握りしめて、人影めがけて走り出した。

どんつとぶつかる衝撃、それに次いで包丁の刃が肉に食い込む感触。そして滲み出た血が包丁を伝って私の両手を濡らす感覚。

人影が倒れ、私は立ち尽くしたまま倒れたその人を見下ろしていた。

死んだのだろうか。

そう考えて、唐突にやって来た恐怖と罪悪感。

私は人を殺したのだ。

何もかもが怖くなって、私は逃げた。ハンカチも包丁も刺した人もそのままにして、私は走った。

今はただ、家に帰りたいかった。

あれ程嫌いなモノで溢れていた家に、帰りたくて仕方がなかった。

既視感（ストーカーがいる）

あの夜から、私は常に何かから逃げるように生活している。

あの夜の事は、事件になっていなかった。

新聞を見ても、ニュースを見ても、何もなかった。

ただ、以前と変わらない日常の中で、私だけが変わってしまった。
何かに怯え、隠れ、逃げるように生活している。

学校以外で家を出る事もなく、風呂とトイレ以外で部屋を出る事もない生活。窮屈ではあったが、部屋で布団に潜り込んでいる間だけは、恐怖と罪悪感から逃げる事が出来た。

そうして二週間がたち、私は徐々に活動範囲を広げていった。

二週間、何の変化もなかった事にすっかり安心してしまっていたのだ。

学校帰りにファーストフード店に寄ったり、休日に買い物に出かけたりした。

そうしてすっかり以前の生活を取り戻した筈だった。

なのに。

あの夜から二週間と二日。私は視線に悩まされていた。

街を歩けば必ず感じる視線。もしかしたら、あの夜の事を知っている誰かかもしれない。そう考えると、また恐怖が戻ってきた。

私は再び部屋に籠もるようになった。

学校へ行くのも怖くなって、もう三日も仮病で休んでいる。

外へ出るのが怖い。

視線が怖い。

何もかもが私を責め立てる錯覚。

とにかく、一人になりたかった。

三週間と三日目の深夜零時。人気のない町を、人気のない通りを走る。何も持たず、裸足のままで走る。

複雑に入り組んだ裏通りを抜けると、人通りのない橋に出る。

何もかもから逃げ出したくて、私は走った。

走って、走って、走って。

そして裏通りを抜けると、そのまま減速せずに欄干を飛び越える。

目を閉じて、束の間の浮遊感。

そして暗転。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6591z/>

二人の世界（仮）

2011年12月25日16時46分発行